

# セルバンテスのアルジェ戯曲における アルジェ社会のイメージ

三 倉 康 博

(受付 2014年10月27日)

## 1. は じ め に

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547–1616) は生涯を通してイスラーム世界に大きな関心と理解を示したが、とりわけ、5年の虜囚生活を過ごしたアルジェは、彼にとって重要な土地であり続けた。彼は帰国から間もない時期と晩年に、自身の記憶と社会の関心が交錯するこの地を舞台にした2編の戯曲、すなわち『アルジェ生活』(*El trato de Argel*)と『アルジェの牢獄』(*Los baños de Argel*)を著わしている。

16世紀後半のアルジェは多様な民族が混在し、ムスリムとキリスト教徒が対立と交流のあいだで揺れ動く複雑な社会であった。だが当時のスペインでは、私掠行為の被害、虜囚として抑留された多くの同国人の存在ゆえ、この都市に関する単純化された否定的なイメージが流布していた。本稿では上記の2編の戯曲にみられるアルジェ社会のイメージを比較分析することで、自分が目撃したアルジェの姿を帰国後のスペイン社会のなかでセルバンテスがどのように表象したかを論じたい。

まずセルバンテスのアルジェ虜囚体験当時のアルジェ社会の様相を概観し、それから2編の戯曲に見られるアルジェ社会のイメージを比較分析したい。

## 2. セルバンテスの時代のアルジェ社会

### 2.1. 複雑な社会

若くしてイタリアに渡り、現地でスペイン軍に入隊し、1571年のレパントの海戦などに参加したのち除隊したセルバンテスは、1575年9月、スペイン行きの船にナポリから乗り込んだ。だが祖国の海岸を目前にして、船はアルジェ私掠船団の襲撃を受け、乗員乗客は捕らえられて連行された。セルバンテスは携えていた王弟ドン・ファン・デ・アウストリアらの推薦状ゆえ地位の高い人物と誤解されてしまい、高額の身代金を課せられた。彼は4度脱走を試みるがいずれも失敗し、結局アルジェで5年にわたる虜囚生活を送ったのち、1580年10月、家族と身請け修道会の必死の努力によって身請けされ、辛うじて祖国への帰

国を果たした<sup>1</sup>。

ではセルバンテスが5年間の虜囚生活を送ったアルジェはどのような都市であったか。

当時のアルジェはオスマン帝国の支配下にあり、中央政府から任命された総督——ただし同時代のスペイン人は、アルジェの統治者を「王 (rey)」と呼ぶのが一般的であった——によって統治されていた。この都市は地中海においてキリスト教とイスラームが対峙する最前線の一つであったが、その内実は複雑な様相を示していた<sup>2</sup>。

アルジェは多民族・多宗教都市であり、人口の多数を占めたムスリムの出自も多様であった。まず、「モーロ人 (moros)」とスペイン人が総称した、アラブ・ベルベル系の人々がいたが、彼らはアルジェ古来の住民、周辺地域から流入してきた部族民、グラナダ陥落後のスペインから移住したモリスコ (moriscos) の3種に分かれる。さらにスペイン人が「トルコ人 (turcos)」と総称したムスリムたちもいた。彼らは、エスニックな意味でのトルコ人つまり「生まれながらのトルコ人 (turcos de nación)」と、キリスト教から改宗しムスリムとなった、ヨーロッパ各地出身の改宗者たちすなわち「信仰のトルコ人 (turcos de profesión)」の2種類から成っていた<sup>3</sup>。

アルジェには多くのキリスト教徒も暮らしていたが、そのほとんどは、様々な経緯で自由を喪失した、多様な出自の虜囚たちであり、多くは様々な形態の牢獄に収容されていた。すなわち、戦場で捕らえられてアルジェに連行された兵士、アルジェの私掠船に海上や陸上で捕らえられた民間人などである<sup>4</sup>。

また、アルジェにはユダヤ人の共同体もあり、重要な経済的役割を果たしていた<sup>5</sup>。

- 
- 1 セルバンテスのアルジェ虜囚体験については、様々な伝記や研究書で取り上げられているが、16世紀のオスマン支配下のアルジェ及び北アフリカの状況と関連付けつつセルバンテスの虜囚体験を詳しく記述した研究文献としては、Emilio Sola & José F. de la Peña, *Cervantes y la Berbería. Cervantes, mundo turco-berberisco y servicios secretos en la época de Felipe II*, México D. F.: FCE, 2ª ed., 1996 (1ª ed., 1995) および María Antonia Garcés, *Cervantes in Algiers: A Captive's Tale*, Nashville: Vanderbilt University Press, 2002, pp. 15–123 が挙げられる。
  - 2 オスマン支配下のアルジェに関する現代の代表的な研究としては、John B. Wolf, *The Barbary Coast: Algiers under the Turks, 1500 to 1800*, New York: Norton & Company, 1979を挙げることができる。同時代の資料としては、1612年にバリアドリッドでディエゴ・デ・アエード (Diego de Haedo) という修道院長により出版された (1927年に3巻からなる復刻版が出版されている) 『アルジェの地誌と通史』 (*Topografía e historia general de Argel*) が重要なものである。これはアルジェの社会構造や風俗習慣、さらにアルジェがオスマン支配下に入って以来の歴史について詳述しており、キリスト教徒側の視点からのバイアスはあるが、16世紀アルジェを語るうえで必須の文献である。
  - 3 Diego de Haedo, *Topografía e historia general de Argel*, 3 vols., ed. Ignacio Bauer y Landauer, Madrid: Sociedad de Bibliófilos Españoles, 1927–29, I, pp. 46–55; Wolf, *op.cit.*, p. 97. なお、この2種類の「トルコ人」については、三倉康博「初期近代スペインにおける『トルコ人』の概念に関する一考察」『アジア地域文化研究』3, 2007年, 1–16頁で詳しく論じている。
  - 4 『アルジェの地誌と通史』は、当時のアルジェには2万5千人のキリスト教徒虜囚がいたと述べている (Haedo, *op.cit.*, I, p. 46)。
  - 5 Wolf, *op.cit.*, pp. 104–105.

このような多民族・多宗教の都市であったアルジェにおいては、キリスト教徒虜囚をムスリムが支配する基本的な構図があったが、イスラーム対キリスト教という単純な二元論だけでこの都市を語ることはできない。

アルジェのムスリム諸集団は一枚岩であったわけでは決してなく、先述の2種類の「トルコ人」が政治・経済の実権を握っていた。モーロ人を排除しトルコ人のみによって編成されたイエニチェリ軍団は実質的な「占領軍」として様々な特権を享受していた<sup>6</sup>。一方、この都市最大の経済活動主体である私掠船団の中核を担ったのも改宗者つまり「信仰のトルコ人」たちであった<sup>7</sup>。この両者はしばしば抗争したが、これらの有力者たちに対し、オスマン帝国のスルタンを代理する総督——歴代の総督たちのほとんども改宗者であった<sup>8</sup>——は絶対的な権力を持っていたわけではなく、彼らの利害に配慮しつつ緩やかに統治することが多かった<sup>9</sup>。

一方、キリスト教徒虜囚たちの置かれた状況も多様であった。16世紀及び17世紀初頭のアルジェにおいて、私掠活動はキリスト教勢力、とりわけスペインに対する「聖戦（ジハード）」の一環とみなされていたが<sup>10</sup>、同時に、アルジェが抱えていた恒常的な経済的脆弱さ、人口不足を補完する役割も担っていた。私掠活動がもたらすキリスト教徒虜囚は、労働力や身代金という形でアルジェ経済を支えていたのである<sup>11</sup>。身分が高ければ高額的身代金をかけられ、苛酷な労働は免除された。武器職人、船大工など有用な技術の持ち主は比較的良好な待遇を受けたが、身請けされる可能性は低かった。特別な技能もなく身代金の当てもない貧しい虜囚には、ガレー船漕手をはじめとする肉体労働が待っていた。女性の虜囚は家内労働に従事し、時にはムスリムの妻となった。年少の虜囚は、熱心なムスリムになる可能性が高いと考えられており、所有者は手放すのを拒むことが多かった<sup>12</sup>。

また、アルジェのキリスト教徒虜囚たちが一致団結して、自由になる日を熱烈な信仰の下

6 *Ibid.*, pp. 57–62.

7 *Ibid.*, pp. 62–63. 『アルジェの地誌と通史』によれば、1581年にアルジェで名を成していた私掠船船長35人のうち24人は元キリスト教徒であった (Haedo, *op.cit.*, pp. 89–91)。

8 Wolf, *op.cit.*, p. 65.

9 独断的な統治はアルジェの有力者層との衝突につながった。じっさい、追放されてしまった総督も存在する (*Ibid.*, pp. 57–67)。

10 *Ibid.*, pp. 113–114.

11 *Ibid.*, p. 152; Ellen G. Friedman, *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1983, pp. 55–56, 75–76. アルジェのムスリムもこの点をよく認識しており、キリスト教徒虜囚たちの心身の健康を保つために、彼らを閉じ込めた牢獄内でのキリスト教信仰の自由を認めるなど、一定の配慮を示した (Friedman, *op.cit.*, pp. 77–102)。一部のムスリムが虜囚たちに対し残酷に振る舞った場合もあったが (*Ibid.*, p. 73), アルジェでキリスト教徒虜囚たちの受けた待遇が、当時の地中海世界における奴隷制のなかでとりわけ苛酷なものであったとは言えないし、キリスト教徒勢力もムスリムの船舶や領土に対する私掠活動をおこない、捕えたムスリムの男女を奴隷としていた (Wolf, *op.cit.*, pp. 171–173) ことも忘れるべきではない。

12 Wolf, *op.cit.*, pp. 151–173; Friedman, *op.cit.*, pp. 55–76.

に待っていたとも言えない。多くのキリスト教徒がイスラームに改宗したからである。

改宗者に関するベナッサール夫妻の詳細な研究によれば、アルジェやその他の地中海イスラーム圏で改宗を選択したキリスト教徒たちの動機は様々であった。ガレー船漕手などの過酷な労働から逃れるために、あるいは自由を回復するために、やむを得ず改宗する人々もいた。年少の虜囚が改宗を強要されることもあった。その一方で、祖国では望み得なかった社会的上昇の機会を求めて改宗する人々も少なからず存在した。地中海イスラーム世界では、新たにムスリムとなった人間に対し、個人の才覚しだい富と権力を得るチャンスが大きく開かれていた<sup>13</sup>。じっさい、先述のように、アルジェの私掠船団、イエニチェリ軍団、行政組織でこれら改宗者たちはきわめて重要な役割を果たした。

一方で改宗者たちは、往々にして複雑な内面の持ち主であり、それがムスリムとキリスト教徒の関係を一層流動的にした。イスラームへの改宗は、キリスト教世界との断絶を常に意味したわけではない。改宗者たちは改宗後に有力な地位を得てからも、同郷の虜囚たちと親しく交流した。また、改宗を後悔し、あるいは望郷の念に苦しめられ、祖国に戻り教会へ復帰したいと願う者もいた<sup>14</sup>。アルジェにおいて、宗教対立は人々の行動を規定した重要な一つの要因には違いないが、すべてではなかった。

## 2.2. スペインとアルジェ：私掠都市への恐怖と憎悪

次に、アルジェ私掠船団の被害をこうむっていた16-17世紀のスペイン人の心理をみてみよう。

16世紀のスペインは、地中海方面において、オスマン帝国と、その海軍の一翼を担った北アフリカ艦隊の前に守勢に立っていた。1581年に両帝国は休戦に至るが、逆にこれ以後、アルジェを中心とした北アフリカ私掠船団は全盛期（ある研究者によれば17世紀半ばまで<sup>15</sup>）を迎える。それはスペインが最も被害を受けた時期でもあり、西地中海の航路や地中海沿岸地方のみならず大西洋岸やカナリア諸島も深刻な脅威にさらされ、虜囚となった人々も社会各層に広がっている<sup>16</sup>。この時期はセルバンテスの帰国後の文学活動とも重なる。

そして北アフリカに連行された虜囚たちを救済するための身請け修道会の活動——虜囚たちや修道士たちの苦難を訴え同情を集めようとする宣伝活動、新大陸にまで広がった寄付金集め、帰国後の感謝の行進など——もまた、社会各層を巻き込んだ大掛かりなものであった。とりわけ、そうした活動を通してムスリムの「残酷さ」や「道徳的退廃（性的放縦）」を身請

13 Bartolomé Bennassar & Lucile Bennassar, *Les Chrétiens d'Allah. L'histoire extraordinaire des renégats, XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles*, Paris: Perrin, 2<sup>e</sup> éd., 2001 (1<sup>e</sup> éd., 1989), pp. 145-340.

14 *Ibid.*, pp. 374-375, 393-396, 442-469.

15 Friedman, *op.cit.*, pp. xxii-xxiii, 28.

16 *Ibid.*, pp. xxv-xxvi, 3-51.

け修道会が徹底的に強調したことは無視できない<sup>17</sup>。

こうした状況下で人々は、アルジェを中心とする北アフリカについて、恐怖と憎悪に満ちた単純化されたイメージを抱いていた。ある研究者の言葉を借りれば、

当時のスペイン人、さらにはほとんどのヨーロッパ人が考えていたのは、いわゆるバーバリー [北アフリカ] の海賊たちの手に落ちた人々は苛酷な労働と残虐な待遇、それも、キリスト教社会、いやそれどころか、かつて存在したいかなる社会において囚人や奴隷に課せられたものよりも残酷なものを、経験するだろうということだった<sup>18</sup>。

つまり、セルバンテスが5年を過ごしたアルジェの複雑な実情と、帰国後の社会がアルジェに対して抱いていた、恐怖と憎悪に満ちたイメージのあいだには、ずれがあった。アルジェが根本においてスペイン人の生命、自由、そして信仰に対する脅威であるという認識をセルバンテスが一貫して抱き続けたにせよ、時をへだてて書かれた2編のアルジェ戯曲からは、二つのアルジェ像のあいだで彼が揺れ動いていたことがわかる。

### 3. 『アルジェ生活』：二元論的対立の世界としてのアルジェ

#### 3.1. 梗概と執筆時期

『アルジェ生活』<sup>19</sup>は、恋人どうしのキリスト教徒虜囚アウレリオ (Aurelio) とシルビア (Silvia) が、改宗者イスフ (Yzuf) とその妻サアラ (Zahara) というムスリム夫婦の所有下に入り、イスフがシルビアに、サアラがアウレリオに恋をするという中心的なプロットと、虜囚たちの様々な苦しみ of 局面を描いたいくつもの断片的なエピソードが組合わされた作品である。貪欲なアルジェ王 (先述のように、じっさいには「総督」に相当するが、劇中では「王」と呼ばれているので、それに合わせる) がイスフ夫妻からアウレリオとシルビアを奪い、スペインから身代金を送るという約束で二人に自由を与え、さらに身請け修道士たちを乗せた船の到着が知らされたところで劇は終わる。

この戯曲の執筆時期に関しては、セルバンテスの初期の作品であり、彼が1580年に帰国してから間もない、劇作に積極的に手を染めていた時期、かつアルジェの記憶がまだ新しい時

17 *Ibid.*, pp. xxvi, 55, 103–128; Sola & Peña, *op.cit.*, pp. 60–62.

18 Friedman, *op.cit.*, p. 55.

19 『アルジェ生活』の参照・引用にあたっては、Miguel de Cervantes Saavedra, *El trato de Argel (Obra completa 2)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1996を使用した。引用箇所を示すさいは TA という略称を用い、論文筆者による日本語訳の直後に (TA, 行数) で該当箇所を示す。[ ] は論文筆者による補足を示す。

期に書かれたという点で研究者たちの共通の理解が得られている<sup>20</sup>。

### 3.2. 対峙する二つの集団

この戯曲におけるアルジェは、キリスト教対イスラームという対立の構図を際立たせるべく図式化された世界である。作者は二つの宗教の信徒たちが正面からぶつかり合う場所として、アルジェ社会を再現する。そのために、前節で概観したように現実には複雑な多元的世界であり、両教徒の関係も流動的であったアルジェは、意図的に単純化されている。

作中で言及される出来事の多くが史実やセルバンテスの経験を反映しているのは確かである。ポルトガル併合のため集結したスペイン軍がアルジェにもたらした動揺や、この節で取り上げるバレンシアの司祭の殉教は、現実起こった事件である<sup>21</sup>。奴隷市場の描写、脱走に失敗した虜囚を裁くアルジェ王の姿にも、セルバンテスの実体験や見聞が投影されているであろう<sup>22</sup>。それゆえこの戯曲の「記録性」が強調されることもある<sup>23</sup>。しかし史実や実体験を多く描きさえすれば現実のアルジェの再現になるというわけではない。この戯曲は現実のアルジェの複雑さ、多様性を伝えるような要素を排除しており、全体としては、我々が前節でみたアルジェとは異質の、単純化された世界を描き出している。

『生活』で特に重要なのは、ムスリムとキリスト教徒の双方が、一枚岩に近い集団として描かれており、それによって両者の対立がより際立つということである。この戯曲では、ムスリム共同体はアルジェ王ハッサンの強大な権力のもとに団結している。もっとも王への反抗は皆無ではなく、改宗者イスフは、シルビアへ恋慕ゆえに、アルジェ防衛強化に協力せよとの王命に背き、アウレリオとシルビアの存在を知った王が身代金目当てに二人を奪おうとすると、さらに抵抗する。しかしこれはアルジェのムスリム社会に深く根差した構造的な亀裂というより、一人の美しい女虜囚の存在がもたらした個人的、内面的な逸脱である。イスフ

20 この点に関してはジャン・カナヴァッジョが最も精緻な考察をしており、執筆時期を1581-1583年のあいだに絞り込んでいる。1580年11月の帰国後数カ月にわたってセルバンテスが文学外の活動に従事したこと、1580年10月から1581年11月までマドリードの劇場が閉鎖されていたこと、当時の人気劇作家ファン・デ・ラ・クエバ (Juan de la Cueva) が1583年に出版した作品集の影響が、もう一つの初期劇『ヌマンシア』(Numancia)とは異なり希薄なことが根拠である (Jean Canavaggio, *Cervantes dramaturge. Un théâtre à naître*, Paris: Press Universitaires de France, 1977, pp. 20-21)。なお『アルジェ生活』の執筆時期をめぐる研究史は、*ibid.*, pp. 18-19を参照。

21 1580年にポルトガル併合のため集結したスペイン軍の目的がわからず、アルジェが不安に駆られた件については、Haedo, *op.cit.*, I, pp. 40-41に記述がある。

22 セルバンテス自身、脱走に失敗したさいに、アルジェ総督ハッサン・パシヤの前に連行された経験がある (Garcés, *op.cit.*, pp. 47, 55; Sola & Peña, *op.cit.*, pp. 259-263)。

23 Armando Cotarelo y Valledor, *El teatro de Cervantes. Estudio crítico*, Madrid: Tipografía de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1915, pp. 188-190; Louise Fothergill-Payne, "Los tratos de Argel, Los cautivos de Argel y Los baños de Argel: tres 'trasuntos' de un 'asunto'", in J. M. Ruano de la Haza (ed.), *El mundo del teatro español en su Siglo de Oro: ensayos dedicados a John E. Varey*, Ottawa: Dovehouse Editions Canada, 1989, pp. 177-178.

本人の独白がそれを示している。「わしよりも年季が入り経験豊かな兵士たちを王は指揮下に  
召し抱えておいでだ。わしのことは放っておいてもらいたい、わしには別の心配事がある」  
(TA, vv. 1388-1390)。そしてイスフのこの抵抗は、王からの厳罰によって終わる。

ムスリムたちと対峙するキリスト教徒共同体についても、同様のことが言える。虜囚たち  
がアルジェでどのような日常生活をしているのかという具体的な情報は希薄であり、彼らの  
経験の多様性や個性よりも、集団性や団結が強調される<sup>24</sup>。もっとも、ペドロ (Pedro) と  
いう虜囚を通して、一瞬、アルジェのキリスト教徒社会のなかにある亀裂——貧しさゆえ身  
代金を払うことができず労働に追い立てられる虜囚と、身代金を待ちながら比較的平穏な生  
活ができる虜囚のあいだにある心理的亀裂——が浮き彫りになりはする。アウレリオとシル  
ビアという、高額的身代金が見込める虜囚がイスフ宅にいることを王に告げて3エスクード  
の褒美を得たペドロは、それを非難する同胞サヤベドラ (Sayavedra) に自分の立場をこう訴  
える。「ほかの方法で自分を救えないのに、そして毎日日雇いで働いて自分自身を養わねばな  
らないのに、自分の身代金を十分払える御仁に対し礼儀をわきましろ、守れって君は言うの  
かい？」(TA, vv. 2093-2097)。さらに彼は、表面的にイスラームに改宗してひとまず自由を  
回復し、帰国のチャンスを窺いたいと告白する (TA, vv. 2138-2155)。

だが一瞬覗いたこの亀裂は、サヤベドラの雄弁な説得によってあっという間に修復され、  
ペドロは身代金をめぐる他の虜囚たちとの立場の違いを越え、キリスト教信仰を固く守りな  
がら虜囚生活に耐える決意をする。サヤベドラもその悔悛を称え、一層の励ましを与える。  
この劇的な改悛によって、アルジェのキリスト教徒たちの団結は逆に一層強調される。

ペドロ [前略] 誓うよ、[中略] 僕は君の忠告に従い、教会の聖なる信徒団から決して  
離れない、たとえ苛酷でつらい奴隷生活のなかで僕の苦しく悲しい命の日々が尽きよ  
うとも。

サヤベドラ その思いに行動が伴えば、心を満たす甘美な日が来るよ、君が自由を手  
に入れる日が。(TA, vv. 2258-2266)

このようにそれぞれの一体性を強調された二つの集団であるが、両者のあいだの交流には  
ほとんど何も言及されず、対立の構図、支配・被支配という関係ばかりが強調される。脱走  
に失敗し捕らえられた虜囚への苛酷な棒打ち刑、虜囚になったキリスト教徒の家族を平気で

24 『アルジェ生活』がキリスト教徒虜囚たちを集団的に描いているという点は、先行研究で指摘されて  
いる (Stanislav Zimic, *El teatro de Cervantes*, Madrid: Castalia, 1992, pp. 37-38; Florencio Sevilla  
Arroyo & Antonio Rey Hazas, "Introducción", in Miguel de Cervantes Saavedra, *El trato de Argel*  
(*Obra completa* 2), pp. XVI-XXV)。しかし、そのことがアルジェ社会のイメージの単純化につな  
がっているという点は、指摘されていない。

引き裂く、奴隷市場の売り手と買い手、自由をちらつかせて虜囚を自分の情欲の対象にしようとするイスフとサアラ、高額の身代金を得ようとする王ハッサン……。そしてなかでも、私掠船を率いてスペイン近海を荒らし回っていたモリスコが捕えられ、異端審問所によってバレンシアで火刑に処せられたことにアルジェにいた彼の親族たちが激昂し、バレンシア出身の虜囚司祭を買い取って虐殺するという事件<sup>25</sup>は、集団的憎悪と人身売買の犠牲者になった司祭を通して、アルジェでキリスト教徒が置かれた悲惨な立場を生々しく示すとともに、アルジェとスペインの地中海を挟んだ敵対関係がアルジェ内でのムスリムとキリスト教徒の関係に影響していることを明らかにする。司祭の殉教を知らされたサヤベドラは言う。「バレンシアでの死がここアルジェで報復されるのは耐えがたいことだ。かの地では、悪を処罰することで正義が示される。ここでは、不正義がなしう限りの残酷さが示される」(TA, vv. 697-702)。

### 3.3. キリスト教社会との断絶としての改宗

キリスト教徒とムスリムの二つの集団が対立するアルジェという構図をこのように強調する『アルジェ生活』においては、キリスト教からイスラームへの改宗は、キリスト教社会からの完全な決別を意味する。

たとえば、前述のように、当面の生活を楽しなものにするために表面的にイスラームに改宗し、キリスト教国へ戻るチャンスを待とうと考えるペドロを、サヤベドラは説得し思い止まらせるのだが、そのさい彼は、新約聖書の言葉を引きながら、一切の妥協を許さない厳格な立場を貫く。「キリストご自身がこう述べておられるのを知らないのか、『人々の前で私を否定する者は、私によって我が父の前で否定されるであろう。人々の前で私に告白する者は、私によって救われるであろう、永遠の我が父の前で』<sup>26</sup>と？」(TA, vv. 2215-2220)

一方、じっさいに改宗した少年虜囚ファン (Juan) は、アルジェの路上で出会った兄フランシスコ (Francisco) を「犬」呼ばわりし、兄弟の絆がもはや存在しないと宣言する。この作品における改宗という行為の意味が最も際立つ瞬間である。

フランシスコ 親愛なる弟よ、僕を抱きしめてくれ！

ファン 弟だって？ いったいつから？ 犬はあっちへ行行って欲しいな、僕に前足を

25 セルバンテスは『アルジェの地誌と通史』の伝える、ミゲル・デ・アラランダという司祭の殉教 (1577年) からヒントを得ている。この司祭は実際に、バレンシアで異端審問所により処刑されたモリスコの親族たちによって、報復のためにアルジェで殺された (Haedo, *op.cit.*, III, pp. 137-155)。

26 「マタイによる福音書」, 10. 32-33. 新共同訳では、「人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う」(共同訳聖書実行委員会 (編)『新約聖書 新共同訳』日本聖書教会, 1992年, 18頁)。



触れないで欲しい。(TA, vv. 1835-1838)

そしてファンは兄の必死の説得を聞き入れず、こう会話を打ち切るのである。「さらばだ、大きな罪だからね、キリスト教徒との話に興じるのは」(TA, vv. 1857-1858)。

要するに、この作品において、キリスト教徒とムスリムの二つの世界のあいだに中間的な存在、曖昧な存在はあり得ない。一方の世界を否定することは、もう一方と完全に同一化することなのである。

『アルジェ生活』はセルバンテスがアルジェから帰国して間もない時期に書いた作品であり、先述のように、自己の体験や歴史的事件の多くを取り込んでいる。しかしそうした情報を意図的に取捨選択することにより、『生活』が描くアルジェ社会は、意識的にイメージを操作され、二元論的な対立の図式に還元された社会となっているのである。

#### 4. 『アルジェの牢獄』：多元的な「ノアの箱舟」としてのアルジェ

##### 4.1. 梗概と執筆時期

『アルジェの牢獄』<sup>27</sup>は、2種類の恋愛プロットが劇の中心にある。恋人どうしのキリスト教徒虜囚ドン・フェルナンド (don Fernando) とコスタンサ (Costanza) が私掠船船長カウラリー (Caurali) とその妻アリーマ (Halima) というムスリム夫婦の所有下に入り、カウラリーがコスタンサに、アリーマがドン・フェルナンドに恋をするというプロットは、『アルジェ生活』のアウレリオ、シルビア、イスフ、サアラのプロットに類似している。もう一つは、キリスト教への改宗およびキリスト教徒との結婚を望むモーロ人女性サアラ (Zahara) とキリスト教徒虜囚ドン・ロペ (don Lope) の恋愛プロットである。この二つのプロットに、虜囚生活の様々な局面を示す多くの副次的なエピソードが加わっている。ドン・ロペとサアラの尽力により主な虜囚たちがアルジェから船で脱出するところで劇は終わる。

この戯曲は、1615年に刊行された戯曲集に収録されている。その実質的な執筆時期に関しては、かつては『アルジェ生活』と同時期の作品とみなす意見もあったが、ジャン・カナヴァッジョが緻密な検証を経て、1580年代に『牢獄』が構想されあるいは一部が執筆された可能性はあるものの、マドリードに定住した晩年のセルバンテスが再び劇作に手を染めたと考えられる時期 (1606-1615年) に大幅に修正され、この時期のセルバンテスを強

27 『アルジェの牢獄』の参照・引用にあたっては、Miguel de Cervantes Saavedra, *Los baños de Argel. El rufián dichoso (Obra completa 14)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1998を使用した。引用箇所を示すさいは BA という略称を用い、論文筆者による日本語訳の直後に (BA, 行数) で該当箇所を示す。[ ] は論文筆者による補足を示す。

く反映した作品になったと主張して以来、彼の説が広く受け入れられている<sup>28</sup>。

#### 4.2. キリスト教徒とムスリム：双方の複雑な内実

『アルジェの牢獄』は、『アルジェ生活』よりも詳細にアルジェを描き出している<sup>29</sup>。人生の最後になってセルバンテスは、彼がじっさいに目撃しそのなかで5年の歳月を過ごした多様にして複雑なアルジェ、私掠活動により繁栄する一方で様々な社会的葛藤に満ちた港町——我々はその有り様を第2節でみた——の忠実な再現とまでは言えなくとも、その本質をより良く示す世界を、文学のなかに構築した。

とりわけこの戯曲では、キリスト教徒共同体とムスリム共同体それぞれが互いに一枚岩に結束して対峙するという『アルジェ生活』的な構図は不在であり、各々が内包する複雑な葛藤が明らかにされている。まずはこの点から検討しよう。

『アルジェの牢獄』では、キリスト教徒虜囚たちが構成する共同体の多様性が詳細に描かれる。単に、労働を課せられた虜囚と無為に日々を過ごす身代金虜囚が描き分けられるだけではない。強制労働にも様々な種類がある——城壁の修復、材木集め、煉瓦造り、等々——だけでなく、袖の下を用いて楽な仕事にありつく者もあれば、病にもかかわらず労働に駆り立てられる虜囚もいる。そしてまた、有能な技術者は重宝される代わりに身代金によって自由を回復することが困難になるという、虜囚たちの置かれた状況の一面も明らかにされる。自分が大工であることを迂闊にもアルジェ王（この戯曲でもアルジェ総督は「王」と呼ばれている）に告白した虜囚の姿を目撃した改宗者アセン（Hazén）は、その運命を予言する。「ああ、何と世間知らずのキリスト教徒！ お前さんは金銭の力でこの嵐から安全な港へたどりつくことはできまい。職人は、命が続く限り、この連中の手から自由になることを期待するだけ無駄なのさ」（BA, vv. 714-719）。

さらに、故郷の村で聖具保管係をしていたトリスタン（Tristán）という名の虜囚の存在は、虜囚たちの共同体の複雑さをさらに一層際立たせる。有力なイエニチェリの所有下に入ったこの虜囚は、強力な後ろ盾を誇り、アルジェの町を我が物顔に闊歩する。彼の言葉には、自

28 Canavaggio, *op.cit.*, pp. 22-23. なお『アルジェの牢獄』の執筆時期をめぐる研究史は、*ibid.*, pp. 18-20および Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, “Introducción”, in Miguel de Cervantes Saavedra, *Los baños de Argel. El rufián dichoso (Obra completa 14)*, pp. XII-XV にまとめられている。

29 『アルジェの牢獄』がアルジェ社会を詳細に描いている点には、アルベール・マスとジャン・カナヴァッジョが言及している。マスは『牢獄』が虜囚たちの労働の様々な種類を挙げているのは他作家の作品にはみられないことだと指摘する（Albert Mas, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d'Or (recherches sur l'évolution d'un thème littéraire)*, 2 vols, Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967, II, pp. 373-374）。カナヴァッジョは私掠活動により繁栄するアルジェ社会の「政治的・人間的パノラマ」をこの戯曲に見いだしている。彼が指摘する具体的箇所は多くが本稿と重なるが（カウラーイを出迎える王、ユダヤ人を巡る問題、虜囚たちの置かれた状況の多様さ）、トリスタンの虜囚ゆえの「社会的上昇」には触れていない（Canavaggio, *op.cit.*, pp. 395-396）。

由を喪失し言葉も文化も宗教も異なる異国へ連れて来られたことからくる精神的打撃を、ほとんど読み取ることができない。むしろ彼を通して、一部のキリスト教徒にとっては、アルジェでの虜囚生活が、生まれ故郷ではありえなかった社会的上昇への契機となりえたという事情が浮かび上がるだろう。

俺は自分の不幸を褒め称えるよ、だって、囚われの、惨めな奴隷にされたのが転じて、不幸のおかげで俺はイエニチェリの所有になったんだ、それも勇猛な。何しろどんなトルコ人も、王様も、どんな奴も、イエニチェリが所有する虜囚には目を向けることも手を触れることもできないんだ。(BA, vv. 1197-1204)

それと同時に、『アルジェの牢獄』は、アルジェのムスリム共同体の多様な側面も明らかにする。スペインの海岸を襲撃し、捕えた虜囚たちを連れて帰港した私掠船船長カウラーイーを港まで出迎えて熱烈に歓迎するアルジェ王（『生活』と同じくハッサンという名である）の姿は、私掠船船長たちと、オスマン中央政府に任命された統治者の緊密な関係を示している。

カウラーイー み足を下され、強きハッサンよ、わが王として、主君として。  
ハッサン かくも気高い唇、かくも勇敢な船長にわしの足を与えるなんぞ、あり得ないことじゃ。地面から身を起こすのだ。(BA, vv. 637-642)

王ハッサンは続けて、虜囚たちを自分の前に連れてくるよう命じる。これは、私掠行為による戦利品の一部は統治者に取り分があったという史実<sup>30</sup>を反映しているのだが、同時に、労働力となる虜囚を探し求める王（この場面では「パシャ」と呼ばれている）の言葉は、ただの貪欲さよりむしろ、労働力不足を私掠活動で埋め合わせる必要のあったアルジェの統治者の関心を表している。

パシャ 虜囚の数はどれくらいだ？  
イスフ 百二十人でございます。  
パシャ そいつらのなかに權を漕がせるのにちょうどいい連中にはいるか？ 職人はいるか？ (BA, vv. 662-664)

だが、王が虜囚たちを検分しているところへ、イエニチェリたちが宮殿で彼を待っている

---

30 Wolf, *op.cit.*, p. 153.

という知らせが入る。急いで港を去る王の姿に、私掠船船長たちと対峙するもう一つの権力集団と王の緊張した関係、アルジェのイスラーム社会の別の面が暗示されているだろう。専制的統治者であった『生活』の同名の王とは違い、『牢獄』の王の権力は微妙なバランスの上に成り立っていること、この王が有力者たちに気を使う調整型の統治者であることがここで示唆されている。

モーロ人 イエニチェリたちが宮殿で閣下を待っております。

パシャ 行こう。さらばだ、船長！ またゆっくり会おう。(BA, vv. 762-765)

また、『アルジェ生活』には登場しなかったカーディー<sup>31</sup>が、『アルジェの牢獄』では重要な役割を果たす点も見逃せない。この戯曲の結末近くにはやはり聴訴の場面があるが、『アルジェ生活』とは異なり、『牢獄』の王はカーディーの補佐を受けつつ聴訴をおこなう。

とりわけ興味深いのは、聖具保管係トリスタンとユダヤ人のあいだの紛争を、王がカーディーとともに調停する場面である。ここでは、『生活』に登場しなかったユダヤ人が登場することで、アルジェ社会の一層の複雑さが示されるとともに、有力なイエニチェリに所有されるキリスト教徒虜囚には、王といえども簡単には手出しできないことが示されている（先ほど引用したトリスタンの言葉が、ここで実証されている）。

ユダヤ人 このキリスト教徒がこの私の子供を奪ったところなのです。

カーディー 何が目的でこの子供を欲しがらるのだ？

聖具保管係 いい子供じゃないか？ 身請けさせるためだ、もし拒むなら、俺が育てて主の祈りを教えてやる。[中略]

ユダヤ人 このスペイン人は、閣下、我々ユダヤ人街を破滅させようとしています。彼の爪から逃れられるものはそこに何もありません。

[中略]

王 お前の主人は誰だ？

聖具保管係 モラト分隊長さ。

王 あんたが何とかしてやってくれ、お願いだ。

カーディー お願いしたいのはこちらです [後略]。(BA, vv. 2514-2526)

31 カーディーはイスラーム世界における裁判官だが、紛争解決にとどまらず法行政全般を担当した（日本イスラーム協会ほか（監）『新イスラーム事典』平凡社、2002年、176-177頁）。

### 4.3. 対立と交流

『牢獄』においては、ムスリムによるキリスト教徒虜囚に対する残酷な行為は数多く描かれている。病気の虜囚を労働に追い立てる牢獄の看守長、脱走に失敗し耳を切られる虜囚、スペイン艦隊の昼気楼に動揺したイエニチェリたちによるキリスト教徒虜囚の虐殺、少年虜囚にイスラームへの改宗を強いて殉教に追いやるカーディー……。だが、多元社会アルジェが詳細に再現されたこの戯曲では、ムスリムの残酷な行為はアルジェの社会生活の一側面を示しはしても、『生活』とは異なり、キリスト教徒対ムスリムという単純な二元論に直結することはない。なぜなら、この戯曲では、両教徒間の敵対関係の一方で、人間的な交流も詳細に描かれているからである。

たとえば、ドン・ロペとサアラが主導するアルジェ脱出計画に参加するキリスト教徒虜囚たちは、アルジェ郊外にサアラの父で町の有力者であるアヒ・モラート (Agi Morato) が持つ庭園で数日過ごすことの許可を、主人のカーディー (もちろん計画のことは知らない) から得ている。アルジェのムスリムたちが時にはキリスト教徒の余暇の便宜をはかることがここで示されている。

キリスト教徒 君たちはこれからどこへ行く？

オソリオ [キリスト教徒虜囚] アヒ・モラートがカーディーに、我々を三日か四日、自分の庭園に行かせるよう頼んだんだ。娘のサアラと、カウラリーの妻の美しいアリーマとともに、そこでずっとひと夏過ごすつもりなんだ。

キリスト教徒 いつかほくも行って、君たちと少しくつろぐかもしれない。

オソリオ 大歓迎だよ。(BA, vv. 2868-2879)

キリスト教の復活祭を、アルジェ当局の公認のもとで虜囚たちが牢獄で祝い、余興として劇を上演する場面は特に興味深い。モーロ人やトルコ人が気軽に足を運びキリスト教徒たちと交流する、そんな牢獄の生活の一面に我々は触れることができる。そこでは、ムスリムとキリスト教徒の緊張した関係も、一時的にせよ緩和される。

牢獄の出入りを管理するモーロ人からして、キリスト教の祝祭に興味津々で、覗いてみたいという衝動を押さえられない。

モーロ人 [前略] 入って、扉のところから我々も見てみましょうよ、どんな風に連中がミサを上げるのか。私が思うに、盛大な音楽と合唱があるんでしょう。

看守長 くぐり戸の後ろに行ってみろ、中庭でキリスト教徒たちがしていることがすべて見えるだろう。なかなかの見ものだぞ。(BA, vv. 2051-2056)

さらに、戯曲の冒頭で改宗者イスフとともにスペインの海岸の村を襲撃した私掠船船長カウラーも、突然、虜囚たちが上演する劇を鑑賞に訪れる。虜囚たちのつつましい芸術を前にした会話のなかで、スペインの近海を荒らし回る私掠者と自由を奪われた虜囚たちという、社会的立場の断層は、一時的であるにせよ、消滅へ向かう。

カウラー 座ってくれたまえ諸君、うろたえることはない。諸君の祭りをわしは見物に来たのだから。

ドン・フェルナンド 旦那様、この祭りがあなたにふさわしいものであればよいのですが。

ドン・ロペ ここにお座りになれますよ、私は立っていますから。

カウラー いやいや、友よ、座ってくれ、そろそろ開演だしな。(BA, vv. 2118-2125)

その後、スペイン艦隊の蜃気楼に動揺したイエニチェリたちによるキリスト教徒虐殺の知らせが入り、牢獄内の祝祭は混乱のなかで終わってしまう。アルジェにおけるキリスト教信仰の自由が不安定なものであることがここで明らかとなる。だがその一方で、緊迫した状況のなかで虜囚たちに急を告げるモーロ人——「キリスト教徒たち、気をつけるんだ、牢獄の扉を閉めろ！」(BA, vv. 2250-2251)「そのキリスト教徒は開けて入れてやれ、怪我をしている、そしてすぐに扉を閉めろ！」(BA, vv. 2253-2254)——や、イエニチェリの行動に対し義憤に駆られる看守長——「心臓が胸のなかで張り裂けるようだ、わしゃ怒りが収まらんわい！」(BA, vv. 2291-2292)——の言葉は、イエニチェリがすべてのムスリムに支持されているわけではないこと、ムスリムとキリスト教徒のあいだに好意的な関係が時に存在することを示している。

#### 4.4. 改宗：その多様なあり方

この戯曲では、キリスト教徒虜囚の改宗についても、『アルジェ生活』よりも多様に描かれている。

戯曲冒頭でカウラーによって捕らえられアルジェに連行された、フアニーコ (Juanico) とフランシスキート (Francisquito) という年少の二人の兄弟は、主人となったカーディーから改宗を執拗に要求される。だが二人は、『アルジェ生活』のファン少年とは違い、最後まで改宗を拒み通し、フランシスキートは磔にされて殉教する。またイスフという改宗者は故郷の村にカウラーを誘導し、親族も含めた同郷者に虜囚の悲劇をもたらす。この3人は、年少者への改宗圧力、そしてアルジェの私掠活動への改宗者の積極的な参加という、いわば改宗の暗黒面を強調する役割を果たしている。

だが、少年虜囚を改宗させようと躍起になるカーディーからアルジェ王は距離を置いてお

り、アルジェの支配層すべてが宗教的狂信に囚われているわけではないことを示している。王はカーディーに言う。

無駄なことはよせ、スペイン人なのだから、お前さんの術策も、怒りも、罰も、約束も、彼の意思を曲げさせることはできまい。強情で、しつこく、猛々しく、荒々しく、傲慢で、不屈の、手に負えない、向こうみずなあの悪党連中のことをあんたがわかってないことと言ったら！ 彼はモーロ人になるくらいなら命を捨てるだろうよ。

(BA, vv. 2483-2490)

またアセンというもう一人の改宗者（先述）は、キリスト教からイスラームへの改宗という行為の別の側面を提示する。彼は改宗を後悔してキリスト教への復帰を望み、平素からキリスト教徒たちと友好関係を築いており、帰国後異端審問所に提出するための書類への署名を虜囚たちから集めて回っている<sup>32</sup>。そしてこのアセンは、アルジェの私掠活動にも加わっているのだが、しかしそれはイスラーム社会のなかで出世するためではなく、キリスト教国へ舞い戻るチャンスを求めてのことである。彼は書類を虜囚たちに示しながら言う。

ここにこう書いてあるんだ、僕が非常に親切にキリスト教徒たちに接し、トルコ人の残酷さを言葉でもおこないでも示すことがなかったのがいかに真実であるかと。僕がいかに多くの人々を助けたかと。子供のころ、強要されてトルコ人になった経緯も。海賊に参加しているが、しかし心の奥では良きキリスト教徒であり、おそらく機会をみつけて陸に、僕にとって約束の地にとどまるつもりだ、そういう思いも書いてある。

(BA, vv. 387-399)

話を聞いた虜囚たちはアセンを称え、喜んで署名に応ずる。内心ではキリスト教信仰を守り脱出の機会を窺いつつも、表向きは私掠船の乗員として振る舞い、キリスト教国への略奪に出掛ける改宗者と、おそらくは私掠船によってアルジェに連れて来られた過去を持ちながら、この改宗者を仲間として受け入れる虜囚たち。『牢獄』においては、セルバンテスの生きたじっさいのアルジェと同様、イスラームへの改宗はキリスト教世界との決定的断絶を意味してはいない<sup>33</sup>。

32 スペインやイタリア出身の改宗者は、帰国すると異端審問所に出頭する義務があり、自分に好意的な証言をキリスト教徒虜囚たちから事前に集めておくことがしばしばおこなわれた (B. & L. Bennassar, *op.cit.*, pp. 20, 451-452)。

33 Ellen M. Anderson, "Playing at Moslem and Christian: The Construction of Gender and the Representation of Faith in Cervantes' Captivity Plays", *Cervantes*, 13 (1993), pp. 37-59は、ムスリムの地にお

今まで述べてきたように、『アルジェの牢獄』のアルジェは、単純な二項対立の町ではもはやない。そこは様々な運命の交錯する世界であり、ある虜囚はこのアルジェを次のように見事に形容している。「アルジェは、僕が思うに、小さなノアの方舟だ」(BA, vv. 2064-2065)。

## 5. 差異の背景

以上みてきたように、二つの戯曲ではアルジェ社会のイメージがかなり異なるが、この差異をもたらしたものは何か。明確な答えを出すのは容易ではないが、『アルジェ生活』で濃厚だった、キリスト教徒虜囚救済を訴えるアピール性<sup>34</sup>が、『アルジェの牢獄』では希薄になっていることが、一つの原因となっている可能性が指摘できよう。

『アルジェ生活』では、スペイン軍のアルジェ攻略への期待、あるいは身請け修道会の活動の意義が再三強調される。たとえば、フェリペ2世によるバダホスへの軍隊集結——史実ではこの軍隊はポルトガル併合(1580年)に向かったのだが——の知らせを聞いて、アルジェの虜囚たちはスペイン王がアルジェ攻略に乗り出し、自分たちを救出してくれることを期待する。虜囚サヤベドラはまず、1541年に神聖ローマ帝国皇帝カール5世(在位1519-1556、スペイン国王カルロス1世としては在位1516-1556)がアルジェ攻略に失敗した事件を想起する。そのうえで、もしフェリペ2世に謁見する機会があれば、次のように訴えたいと言う。「各人が、陛下の艦隊がやって来ないかと目をこらしております [中略]。一万五千のキリスト教徒たちが命を落とそうとしている粗末で辛く過酷な牢獄の錠前の鍵を、陛下はお持ちです」(TA, vv. 432-437)。「おお良き王よ！ 陛下の愛する父君によって大いなる大胆さと勇気をもって始められた事業が、陛下によって完遂されるようになさってください！」(TA, vv. 447-449)。サヤベドラはその一方で、アルジェの防備の弱さを指摘し、自分の願いが実現可能であると強調する。「その民の数は多いけれども、武力は乏しく、裸同然で装備も貧弱、自らを守るための強固な城壁も岩山もありません」(TA, vv. 429-431)。

彼によれば、フェリペ2世がアルジェを攻略し、虜囚たちを救い出すことは、父王以来の国家的事業だが、それだけでなく、レパントの海戦の英雄である異母弟ドン・ファン・デ・

けるキリスト教徒の虜囚生活を描いたセルバンテスの戯曲におけるジェンダー、信仰、アイデンティティの問題を分析し、他者(the Other)に対するセルバンテスの柔軟さが年月と共に増していることを論じた研究であるが、そのなかでも、『アルジェの牢獄』のアセンが『アルジェ生活』の改宗観とは相いれない人物であることを指摘している(pp. 46-47)。

34 『アルジェ生活』のこのようなアピール性は先行研究でも指摘されている(Cotarelo y Valledor, *op.cit.*, pp. 189-190; Robert Marrast, *Miguel de Cervantès dramaturge*, Paris: L'Arche, 1957, pp. 40, 56; Canavaggio, *op.cit.*, p. 388; Zimic, *op.cit.*, pp. 53-54)。



アウストリアの事業を受け継ぐことでもある。ドン・フアンの死（1578年）を知り、恐怖から解放されて、たどたどしいスペイン語でキリスト教徒たちに罵声を浴びせてくるモーロ人の子供たち——「ドン・フアン来ない！ お前らここで死ぬ！」（TA, v. 1526）——に対する虜囚たちの返答には明らかに、そのような認識が示されている（もっとも、フェリペ2世がフランドルの新教徒との戦いに忙殺されていることへの不満も込められているが）。「彼の兄君が来るさ、名高きフェリペが。ルター派のフランドルの御しがたくそびえ立つうなじがあんなに恥知らずにも陛下の王権を侮辱することがなければ、疑いなくもう来ていただけるに」（TA, vv. 1527-1531）。

その一方でこの戯曲は、緊急の対策として、身請けの必要性を強調する。劇の結末では身請け修道士を乗せた船が到着するし、また、主人の誘惑に屈してイスラームに改宗した少年虜囚フアンの姿を目撃した虜囚アウレリオは、観客たちが身請け活動に協力することを呼びかける。「おお、今日から先、囚われのキリスト教徒を手かせ足かせから救い出すために、とりわけ意志の弱い子供たちを救い出すために、キリスト教徒たちの心が慈悲で柔軟になり、与えることにかくも狭量にならなければ良いのだが！」（TA, vv. 1868-1873）。

このように、『アルジェ生活』にはスペイン軍のアルジェ攻略、身請け修道会の活動の意義を強調する顕著な性格があり、その宣伝目的に従って、当時流布していたアルジェの否定的なイメージに合わせ、キリスト教徒対ムスリムという二項対立の図式でアルジェを単純化したのだと考えられる。

それに対し、『アルジェの牢獄』では、そのような宣伝目的は希薄である<sup>35</sup>。スペイン軍のアルジェ侵攻に関して言えば、劇中のキリスト教徒虜囚たちが表明するのは期待ではなく、あきらめである。たとえば、この戯曲には、前節で述べたように、太陽光線の作用でスペイン艦隊の蜃気楼が作り出され、それによってパニック状態に陥ったイエニチェリ部隊が数十人の虜囚たちを虐殺するというエピソード<sup>36</sup>がある。このスペイン艦隊出現の虚報を聞いたときの虜囚たちの冷めた反応は興味深い。狼狽するあるモーロ人に対し、虜囚の一人ギレルモ（Guillermo）は、虚報を信じず、冷静に答えている。

モーロ人　じゃあこの証拠で、間違いに気付き目を覚ましてもらおう。誓って言うが、  
現れたそうなのだ、三百を超えるガレー船が、三角旗と旗をなびかせて。しかもアル  
ジェに向かっているそうだ。

35 『牢獄』が『生活』にみられる軍事的な意図を欠いていることは、カナヴァッジョにより指摘されている（Jean Canavaggio, “Estudio preliminar”, in Miguel de Cervantes Saavedra, *Los baños de Argel*, ed. Jean Canavaggio, Madrid: Taurus, 1983, p. 38）。

36 このエピソードに、地中海におけるスペインの消極性へのセルバンテスの幻滅を見いだした研究がある（Marrast, *op. cit.*, p. 66; Canavaggio, *Cervantès dramaturge*, pp. 396-397）。

ギリエルモ たぶん、魔法によって今度の艦隊は作り出されたんだろう。

(BA, vv. 2285-2290)

また、『牢獄』では、『生活』同様、モーロ人の子供たちがドン・ファン・デ・アウストリアの死を題材にして虜囚たちを嘲る場面がある。「ドン・ファン来ない！ お前らここで死ぬ！」(BA, vv. 1244-1245)。だが、彼らに対するある虜囚の返答も、『生活』の同様の場面でみられたものとは異質であり、祖国への強い期待はない。そこには、レパントの英雄を笑いの種にしてしまう、自虐的な諧謔があるのみである<sup>37</sup>。「疑いない、天上でな、ものすごい戦いがあったに違いない、指揮する将軍がいなかったもんでドン・ファンをさらって行って大将にしたのさ。彼が戦いを終わらせるまで待っておれ、戻って来てお前たちを新兵のようにひとひねりするだろうから」(BA, vv. 1250-1256)。

さらに、『アルジェの牢獄』では、身請け修道会の活動もまったく描かれず、身請け活動への協力が呼びかけられることもない。主だった虜囚たちが救われるのは、神の恩寵に触れキリスト教への改宗を望むモーロ人女性サアラの尽力によってである。

『アルジェの牢獄』でこのようにキリスト教徒虜囚の救済のための行動を訴える性格が後退している理由は、推測にとどまるが、恐らくは作者の虜囚体験からの時間の経過、さらにオスマン帝国との和平(1581年)以後地中海を去り、大西洋とヨーロッパで新教徒との戦いに全力を傾注するスペインの新しい動き<sup>38</sup>が影響しているのだろう。いずれにせよ宣伝目的が後退したがゆえ、アルジェをキリスト教徒虜囚たちの地獄として過度に単純化する必要がなくなり、その結果、この戯曲におけるアルジェは同時代の現実のアルジェにより近づき、その複雑さを明らかにしているのだと考えられる。

## 6. む す び

ミゲル・デ・セルバンテスが5年の虜囚生活を送ったアルジェは、スペインをはじめとするキリスト教国に対する私掠活動によって繁栄を謳歌する一方で、内部では様々な集団が複

37 モーロ人の子供たちの同じ嘲りに対する虜囚たちの反応が『アルジェ生活』と『アルジェの牢獄』で異なる——後者には諧謔の要素が入り込む——ことは、ホアキン・カサルドウエロも指摘している (Joaquín Casaldueiro, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid: Gredos, 2ª ed., 1974 (1ª ed., 1951), p. 88)。

38 このスペインの政策の変化については、Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2 vols., Paris: Armand Colin, 9<sup>e</sup> éd., 1990 (1<sup>e</sup> éd., 1949), II, pp. 431-468 を参照。カナヴァッジョも、『牢獄』における政治的テーマの減少を、スペインの政策の変化とそれに対するセルバンテスの幻滅から説明している (Canavaggio, *Cervantes dramaturge*, pp. 396-397; "Estudio preliminar", pp. 41-42)。

雑で流動的な関係のもとに暮らし、イスラーム対キリスト教の二元論に単純に還元することのできない、多元的な社会であった。だが、北アフリカ私掠船団に大きな被害を受けていた当時のスペイン社会では、この都市の否定的イメージが流布していた。自らの文学のなかでアルジェを再現するさい、セルバンテスはこの都市への深く正確な認識と、帰国後の社会のアルジェに対する敵意とのあいだで板挟みとなる。

セルバンテスがアルジェから帰国して2、3年のうちに書いたとみられる『アルジェ生活』は、スペイン軍のアルジェ侵攻と身請け修道会の活動による虜囚たちの救済を訴える。『生活』のアルジェ社会がキリスト教徒とムスリムの二元論的な対立関係を意図的に強調する形で再創造されているのは、このような宣伝目的に対応していると考えられる。そして、この対立の図式のなかで、ムスリムからの迫害に団結して立ち向かうキリスト教徒の模範性が称揚される。セルバンテスはアルジェの虜囚たちの救済を呼びかけるというアピール目的のために、アルジェに関する深い知識を披歴せず、スペインに広まっていたこの都市の否定的イメージに身を委ねたのである。

実質的に17世紀に入ってからの作品であると考えられる『アルジェの牢獄』では、虜囚たちの救済を訴えるという宣伝の意図は希薄となっており、その制約から解き放たれたがゆえに、アルジェという都市の多様性、複雑さが詳細に再現されていると思われる。この戯曲に描かれたアルジェは、キリスト教徒とムスリムという、明確に分断された二つの集団が恒常的にぶつかり合う二項対立的世界ではなく、多様な運命の交錯する「ノアの方舟」である。

その結果、『アルジェ生活』と『アルジェの牢獄』の2作品は、セルバンテスのアルジェ体験という共通の源泉を持ちながらも、それぞれ異なるアルジェ社会の姿を我々に示していると考えられる。

Summary

The Images of the Society of Algiers in Cervantes' Algerian Plays

Yasuhiro Mikura

Miguel de Cervantes (1547–1616) was held captive in Algiers for five years (1575–80). This study analyzes how Cervantes depicted Algerian society in his plays *El trato de Argel* [*Life in Algiers*], written soon after his return to Spain, and *Los baños de Argel* [*The Dungeons of Algiers*], completed in his last years.

Algiers in the age of Cervantes was a multi-ethnic and multi-religious society where Muslims and Christian captives of various origins lived in a complex web of relationships.

The Algiers in *El trato de Argel* portrays a simplified depiction of society where Christians and Muslims confront each other as monolithic groups. In contrast, *Los baños de Argel* depicts Algiers as a multifaceted society where relations between Christians and Muslims are not limited to antagonism and both religious groups are more heterogeneous. This seems to be a more historically accurate description.

The difference between the two images of Algerian society seems to result from the two plays' divergent intentions. *El trato* advocates the conquest of Algiers and the liberation of the Christians, and this seems to lead to a simplified depiction. In contrast, *Los baños* no longer makes such an appeal, and this transformation seems to enable a more balanced view of society and religious tensions.